

2 祐徳稲荷神社参拝と地域の営みにみる歴史的風致

はじめに

本市には江戸時代に創建した祐徳稲荷神社が存在する。鹿島鍋島藩の信仰が篤かった祐徳稲荷神社は、広く住民に開かれて以来、多くの参拝者が訪れており、現在も市内外から年間 300 万人を超える参拝者を集めている。祐徳稲荷神社の前に形成された祐徳門前町と肥前浜宿は参道で結ばれており、車社会になってからは少なくなっているが、現在においても肥前浜駅で降車し、周辺の散策をしながら徒歩で参拝する人の往来が続いており、近年では肥前浜駅のレンタサイクルを利用した自転車での往来も見かけられるようになった。

祐徳稲荷神社、祐徳門前町、肥前浜宿の傍には、浜川が流れており、流域に生活する人々は、古くから浜川の水をまちなかへ引き入れ、その水を生活用水として利用する生活を送ってきた。現在においても、これらの流域の人々は定期的に浜川の清掃活動を行うなど、浜川を大切にしながら、浜川とともに生活を送っている。



写真 商店街を流れる水路

(1) 伝統的な活動の舞台となるまちなみ

1) 祐徳門前町

祐徳稲荷神社入口から約 300mに商店が連なる門前町がある。

『鹿島市史』(1974)には、江戸時代後期頃、全国的な社寺参拝の風潮を反映して、祐徳稲荷神社にも参拝者が増加し、門前町が形成されたと推察されている。通常、神社の前に形成された町は「鳥居前町」、寺院の前に形成された町は「門前町」と呼ばれるが、祐徳稲荷神社が建つ地には、もともと「祐徳院」という寺院があったことから、祐徳稲荷神社の前に形成された町は祐徳門前町と呼ばれている。

『祐徳稲荷神社案内記』(1909)には「旅館十五六を並ぶ其他手軽の西洋料理屋、酒屋あり、茶店雑貨店あり」との記載がある。また、『地理学講座第7巻』(1937)にも、「旅館、休憩所、土産物店等の並んだ純然たる鳥居門前を形成し」とあり、明治から昭和初期頃には旅館をはじめ多くの店が軒を連ねて、商いをしていたことが分かる。



写真 祐徳門前町



写真 祐徳門前町の店舗

現在の祐徳門前町は、明治29年(1896)に起こった大火の後に再建されたものであるが、現在においても、間口の広い町屋が再建当事の旧状をよく伝えており、アーケードに隠れてはいるが、明治期に建てられた古い建造物が数多く残る。

祐徳門前町の商店は、その多くが土産物店となっており、昭和7年(1932)に作られ始めた名物の「稲荷ようかん」や大正元年(1912)創業の井手商店で作られている「祐徳せんべい」、市内では門前商店街の家庭でよく作られている「ゆずこしょう」などの市内の土産物が店先に並び、参拝の際の土産として親しまれている。



写真 祐徳せんべい



写真 祐徳門前町の商店マップ(『祐徳いろは参歩』パンフレット(発行:祐徳観光商店連盟)より転載)

2) 浜中町八本木宿

浜中町八本木宿は、酒蔵をはじめとした白壁の歴史的な建造物が建ち並び、重要伝統的建造物群保存地区を含む範囲である。有明海からの海上交通の拠点となっていた地域であり、海路や鉄道を利用して祐徳稻荷神社に向かう人々の参道として利用された。詳細は第2章第1項に先述している。

浜中町八本木宿の通り（通称：酒蔵通り）の脇には、浜川から取水された水路が流れており、古くから浜川の水を洗い物などの生活用水として利用してきた。現在においても、浜川から取水した水路の水は、定期的な清掃活動を行い、鯉を生かして観光客を楽しませるなど、生活の中で利用されている。浜川の水をまちなかに引き込み生活に利用する習慣については、同じ浜川流域に位置する祐徳門前町にも存在している。



写真 酒蔵通りを流れる水路



写真 酒蔵通り沿いに流れる浜川

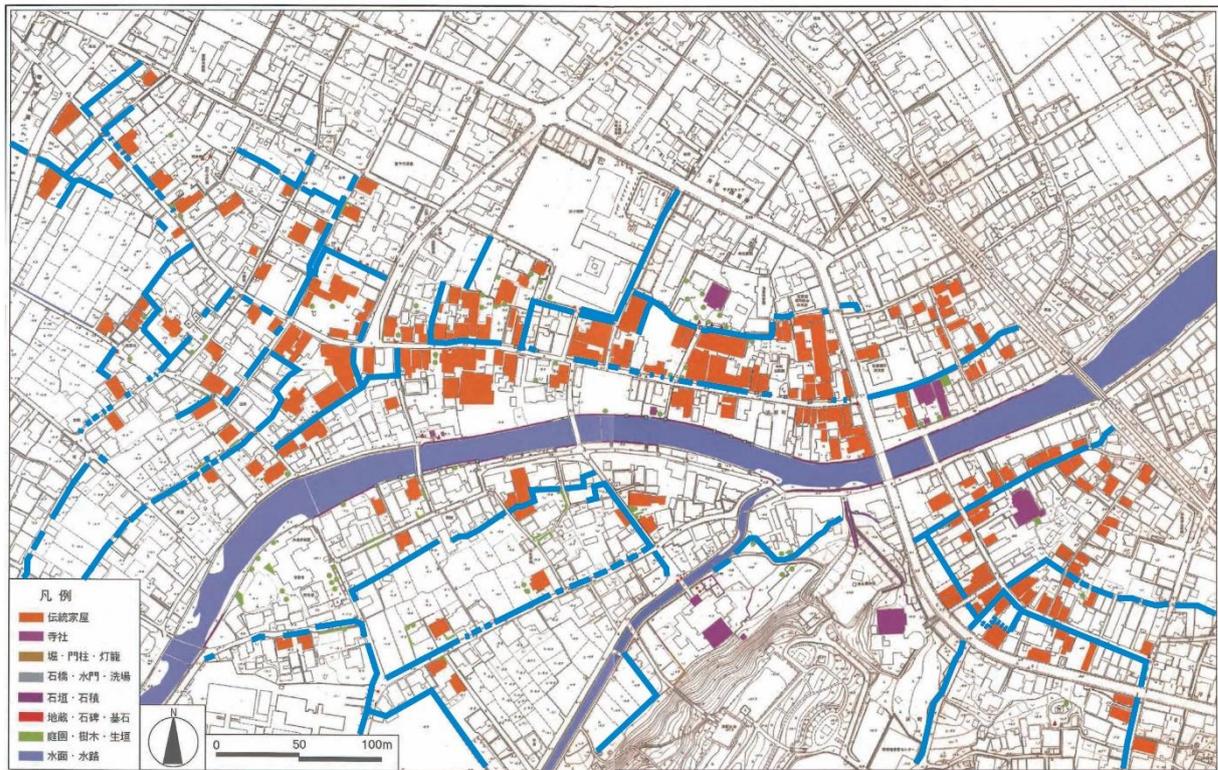


図 肥前浜宿の水路等の分布（『鹿島市浜宿伝統的建造物群保存対策調査報告書』（1999）を基に一部加工）

かみふるえだ しもふるえだ
 3) 上古枝地区・下古枝地区

上古枝地区と下古枝地区は祐徳稲荷神社周辺の地区であり、神社付近を中心として、浜川沿いの谷あいには南北に細長く広がっている。

毎年2月に開催される祐徳稲荷神社の初午祭の際には、上古枝地区の面浮立が神社に奉納され、また、祐徳稲荷神社の参詣道は祐徳門前町のある下古枝地区を経て浜町に至っており、両地区は祐徳稲荷神社と関わりながら生活を送っている。



写真 浜川と上古枝地区のまちなみ



写真 谷あいにある上古枝地区と下古枝地区

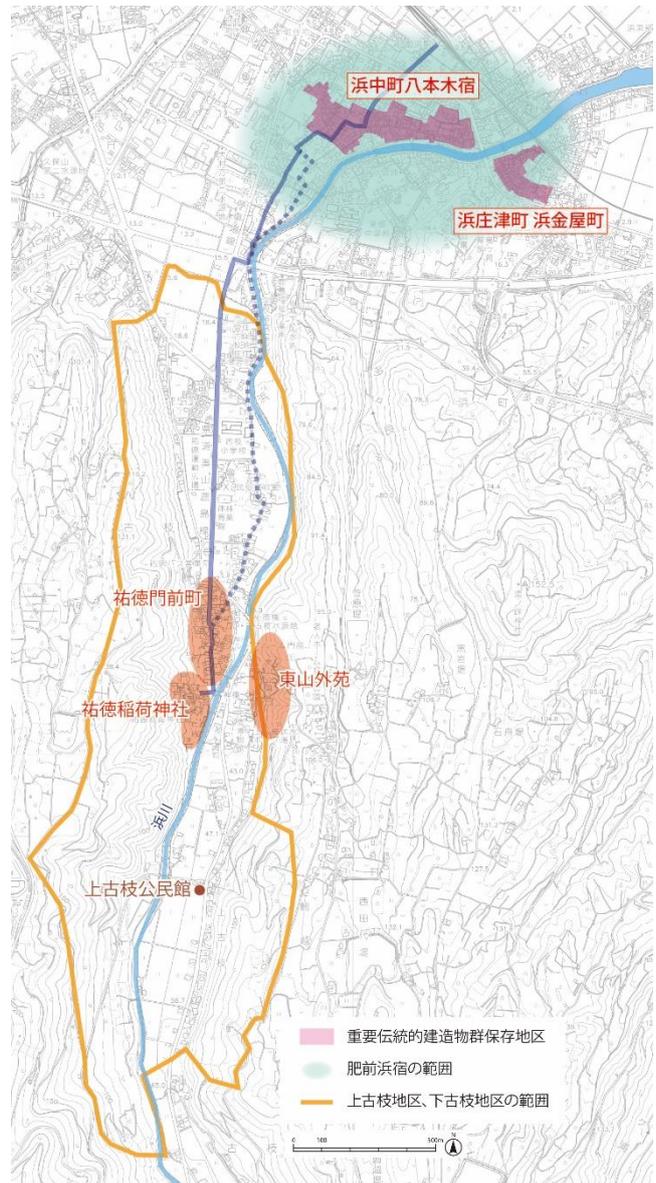


図 上古枝地区・下古枝地区の位置

(2) 伝統的な活動の舞台となる歴史的建造物

1) 祐徳稲荷神社

祐徳稲荷神社の創建は鹿島藩3代藩主の夫人萬子^{まんこ}が嫁ぐ折、朝廷の勅願所^{ちよくがんしょ}であった京都の稲荷大神の御分霊^{ごぶんれい}を勧請したことに由来しており(1章3節参照)、社殿は貞享年間(1684～1688)に建立された。

昭和24年(1949)5月に起きた火災によって社殿のほとんどが焼失したが、その後、市民による再建を図る活動が進められ、昭和32年(1957)に本殿が再建された。

現在、境内には本殿、神楽殿、岩崎社、若宮社、岩本社、命婦社^{みょうぶしや}、石壁社^{せきへき}・水鏡、奥の院、奥の院別社、楼門、手水舎、参集殿などがあり、浜川の対岸には祐徳稲荷神社に関連する文化財等を展示している祐徳博物館がある。祐徳神社境内には複数の社殿(境内社)があるが、このうち、現在の命婦社社殿は佐賀県指定文化財であり、棟札から享和4年(1804)建立と知られ、建立当初から昭和8年(1933)まで本殿であったものを、現在の地に移築したものである。一間社流れ造、屋根は切妻造、銅板葺きであり、正面に千鳥破風^{ちどりやぶかぜ}、軒に唐破風^{からやぶかぜ}がある。また、昭和41年(1966)には神楽殿が竣工、その後も10年ごとの式年大祭の記念として神社施設の整備拡充が行われている。

祐徳稲荷神社は、谷あいの山の斜面に沿うように建っており、背景の山や、対面の東山外苑の緑の景観と一体となって、周辺の市街地環境を形成している。

祐徳稲荷神社やその周辺では、神社の年中行事が開催されているが、そのほかにも、神社境内で各地区の浮立をはじめとする民俗芸能等が披露される「かしま伝承芸能フェスティバル」(平成9年(1997)に開始)が開催されており、祐徳稲荷神社本殿と背面の山に点在する命婦社をはじめとした境内社群は、神社の行事の場としてだけでなく、伝統芸能を継承する舞台としての役割も担っている。

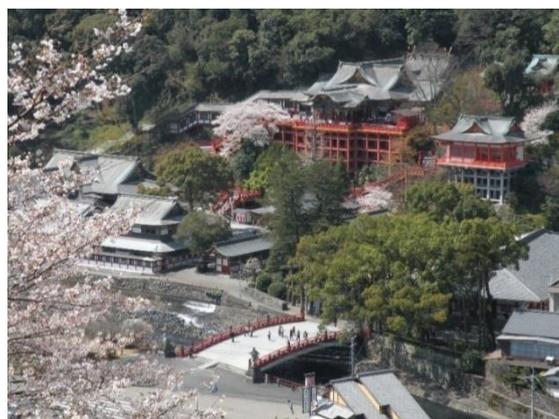


写真 祐徳稲荷神社



写真 祐徳稲荷神社境内社 命婦社



写真 祐徳稲荷神社楼門



写真 祐徳稲荷神社遠景



写真 祐徳稲荷神社境内案内図

2) 東山外苑 ひがしやまがいえん

『祐徳稲荷神社史（坤）』（1941）によると、祐徳稲荷神社御造営 250 年式年大祭を記念するために、境内に隣接した東山に広大な外苑を設置したとの記載があり、また、『鹿島市史』（1974）には、昭和 32 年（1957）の本殿再建の前後に外苑の整備が行われたとの記載があるため、昭和 30 年（1955）代に東山外苑の整備が行われたと分かる。祐徳稲荷神社は谷あいの山の斜面に位置しているが、その対面の山の斜面にあたる東山外苑にはさまざまな花木が植栽されており、桜の咲く春から紅葉に彩られる秋にかけて、山一面に広がる景色が参拝客を楽しませている。また、毎年 8 月 1 日に開催される祐徳夏祭りやぐらの際には櫓やぐらが建てられ、納涼踊りが行われるなど、賑わいの場となる。



写真 東山外苑の桜



写真 東山外苑のつつじと藤棚

3) 祐徳門前町に並ぶ商店

<八犬伝総本家離れ（津多屋）>

大正頃の創業で、当時は旅館を営んでおり、離れの建物は、木造2階建、屋根は切妻造妻入棧瓦葺で壁は真壁造りで、大正期の創業当時の屋号である「津多屋」の鰻絵が、参道部分の正面に残ることから、この部分は大正期に作られたものと分かる。（『鹿島市祐徳門前地区街なみ環境整備事業建物調査結果』（2018）より）。

現在は主屋で丸房露の製造・販売を営んでいる。



写真 八犬伝総本家離れ（津多屋）

<かどや 角屋>

明治30年（1897）5月28日の登記記録があり、代々旅館業が営まれていた。その後、昭和47年（1972）に建物を一部解体して現在の店舗を新築しているが、当初の建物部分が現在も残っている。建物の一部解体、新築以降は土産販売と食堂を営んでいる（『鹿島市祐徳門前地区街なみ環境整備事業建物調査結果』（2018）より）。建築当初の建物部分が残るため、明治期の建築と推定される。

店舗裏手の庭園の池には浜川からの水が引かれ、鯉の生け簀としても利用されている。



写真 角屋

<みとや 三都屋>

明治29年（1896）の大火後、明治30年（1897）頃に現在の建物を建築して旅館業を創業した。1階部分は昭和60年（1985）代に改造して2階部分を鉄骨で持ち上げて支え、内装も改造しているが、屋根形状は当事の姿を残している。昭和40年（1965）頃に土産物販売・食堂に転業し、現在に至っている（『鹿島市祐徳門前地区街なみ環境整備事業建物調査結果』（2018）より）。

店舗裏手の庭園の池には浜川からの水が引かれ、鯉の生簀としても利用されている。



写真 三都屋

<井手商店>

現在の建物は、昭和12年（1937）の建築であり、祐徳門前商店街唯一の洋風建築である。1階部分は改造しているが、全体的に建築当初の姿をよく残している（『鹿島市祐徳門前地区街なみ環境整備事業建物調査結果』（2018）より）。

大正元年（1912）創業の「祐徳せんべい」の製造・販売と、喫茶を営んでいる。



写真 井手商店

<柳屋>

明治29年（1896）の大火後、明治34年（1901）の建築で、戦後に増改築が行われているが、屋根を含め、当時の姿が現在も残っている。旅館業で創業後、食堂・土産物屋を経て、現在は土産専門店が営まれている。（『鹿島市祐徳門前地区街なみ環境整備事業建物調査結果』（2018）より）



写真 柳屋

<松屋>

明治29年（1896）の大火の後、浜町の酒蔵から江戸期の町家を譲り受けて移築したと伝わり、祐徳門前商店街唯一の町家移築建築である。1階表部分は改造されているが、通り土間並びに座敷部分はかつてのものが残っている。2階の開口部に小舞跡があり、明治30年（1897）頃に移築された後に、それまで無かった窓と「松屋」の鰻絵のある戸袋が設けられたと推定される。（『鹿島市祐徳門前地区街なみ環境整備事業建物調査結果』（2018）より）



写真 松屋（店舗裏手より）

<若松屋>

明治29年（1896）の大火後の大正期の建築で、門前町が寄棟造平入りの家屋で整備され、旅館業で財をなしていった時期を彷彿させる建物である。「若松屋」の屋号の鰻絵のある戸袋も残る。明治期に旅館業で創業し、昭和30年（1955）代に旅館業をやめて食堂を営むようになったと伝わる。昭和60年（1985）頃に喫茶店を、平成18年（2006）頃に食堂を増改築し、現在に至る（『鹿島市祐徳門前地区街なみ環境整備事業建物調査結果』（2018）より）。



写真 若松屋

4) 浜川の水を利用した施設

<水路・^{たな}路・庭園>

祐徳門前町のまちなかにも、肥前浜宿のまちなかにも浜川から水を引いた水路が流れており、それぞれのまちなみを構成する要素となっている。

祐徳門前町を流れる水路は、明治期の大火後に行われた町の再建の際に、それまで建物の前面を流れていたものを、裏手に流れるよう作り直したことが『古枝村ノ内 式拾三番字壺本松全圖』より分かり、少なくとも明治期には祐徳門前町のまちなかに水路が流れていたことが分かる。この水路の水は、商店や個人宅の庭園の池へと引き込まれ、現在においても観光客の目を楽しませている。

肥前浜宿では、まちなかを流れる水路の各所に石積みの棚路（水路へ降りる石段）が設けられており、日常の洗い物は、この水路の水を使っていたと伝わり、現在においても水路に鯉を生かすなどの利用が続いている。



写真 浜川の水が引き込まれた庭園



写真 棚路

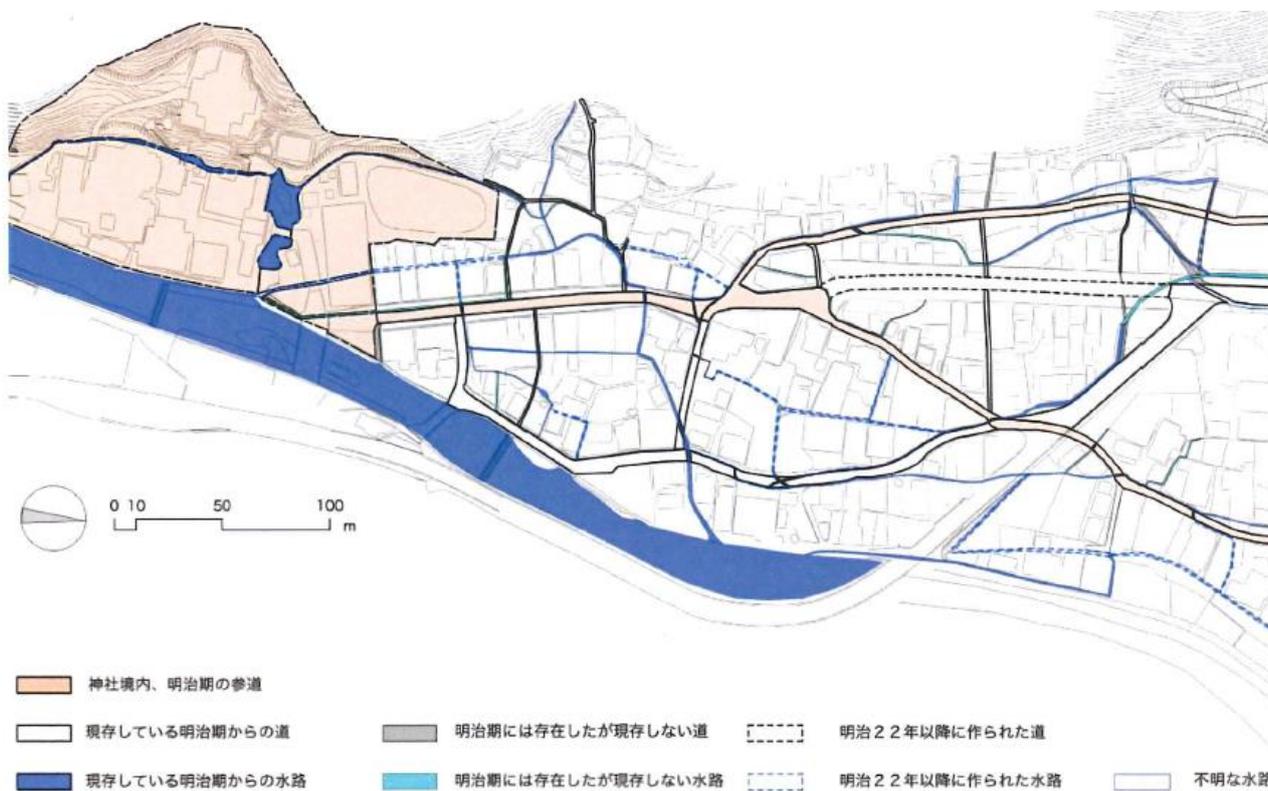


図 祐徳門前町の水路の変遷（『鹿島市祐徳門前地区街なみ環境整備事業計画書』（2018）より転載）
『古枝村ノ内 式拾三番字壺本松全圖』（明治22年（1889）2月調整、鹿島市市民図書館蔵）を基に作成したもの

(3) 伝統や文化を反映した活動

1) 祐徳稲荷神社の年中行事

＜お火たき（祐徳稲荷神社秋季大祭）＞

毎年12月8日に行われる祐徳稲荷神社秋季大祭の夜の神事である。境内に設置された「お山」の燃え上がる御神火にあたり、多くの参拝客が病気の治癒を祈願し、穢れを祓う。参拝者には、神社の御齋田ごさいでんで収穫された米で作られた甘酒が振舞われる。

創建当初、京都の火祭を偲んで開始されたと推察されており、昭和31年（1956）12月1日付の鹿島市報でお火たきが紹介されていることから、少なくともその頃には行われていたと分かる。

参拝者は、お火たきの燃えさしを持ち帰り、神棚に供える風習が今も続いている。



写真 お火たき



写真 燃えさしを持ち帰る参拝者

＜お田植祭・拔穂祭＞

毎年、6月中旬に祐徳稲荷神社で開催する年中行事である。献穀用として、神社の巫女けんこくが紺こんがすり 紵たすきの着物、赤すげがさ 檮さ、菅笠さおとめを身に着けた早乙女姿で、笛と拍子に合わせ、御齋田にて田植えを行う。昭和40年（1965）11月1日付の鹿島市報に「拔穂祭」（御齋田の稲を収穫する祭事）の記事があり、「35年前から行われている」とあることから、昭和5年（1930）頃から行われていることが分かる。

御齋田で収穫された献穀米は、秋季大祭（新嘗祭）の祭事や、お火たきの参拝者への振舞い甘酒の原料として使用される。

現在の御齋田は、祐徳稲荷神社の南側にある山祇神社の、浜川を挟んで対岸にある田であり、お田植祭や拔穂祭の際には、山祇神社側から川を渡り、御齋田へ向かう。



写真 お田植祭



写真 浜川を渡り御齋田へ向かう



写真 お田植祭（昭和5年（1930））

<祐徳夏まつり>

毎年八朔の日の8月1日に行われる祐徳稲荷神社の年中行事である。夏越大祓^{なごしのおおほらえ}を兼ね五穀豊穰^{ごこくほうじょう}と諸業^{しよぎよ}繁栄^{はんえい}を祈る。昼間は祐徳門前町でイベントが開催され、夜には、灯籠の灯りに浮かぶ境内を背景に、東山外苑に設置される櫓^{やぐら}の周りで納涼踊りが行われるなど、一日中賑わう。

平成21年(2009)に発行された地元ミニコミ誌『ナイスわが街抜粋版』の平成11年(1999)8月1日の記事に「今年で37回目となる祐徳神社の夏祭りが神社の周辺で開催される。」との記載があることから、昭和38年(1963)頃から祐徳夏まつりが開催されていることが分かる。

写真は夏まつりの恒例行事で、祐徳稲荷神社前を流れる浜川で行われる「鯉つかみ」の様子である。鯉つかみで獲った鯉は、自宅へ持ち帰ることができるが、鯉料理が名物である祐徳門前町の食堂に持ち込めば調理してもらうこともできる。



写真 祐徳夏祭り(鯉つかみ)

はつうまい <初午祭>

初午祭は、稲荷大神が伏見に鎮座されたのが和銅4年(711)2月の初午の日であったことから、毎年2月の初午の日に行われる年中行事である。祐徳稲荷神社では、延享4年(1747)2月10日に初めて初午祭が開催されたことが『鹿島市史』(1974)に記載されており、また、昭和4年(1929)に祐徳稲荷神社から発行されたパンフレットの「年中祭日の概略」に初午祭の記載もあり、古い時代から開催されていることが分かる。

深夜0時から祈祷が開始され、商売繁盛などが祈願される。境内では、国指定の無形民俗文化財である平戸神楽、上古枝の面浮立、大村方獅子舞、その他の芸能の奉納などが行われ、一日中賑わう。

祐徳稲荷神社の初午祭で奉納される上古枝面浮立は、上古枝公民館で演じた後、祐徳門前町の入口へ移動し、まちなかを道行^{みちゆき}(神前に向かう道を、踊りの所作を行いな



写真 初午祭で奉納される上古枝面浮立



写真 祐徳門前町での道行

がら巡行すること)で練り歩き、神社境内にて奉納踊りを行う。

上古枝の面浮立は、浜祇園祭で奉納される野畠面浮立と同じ「母ヶ浦系統」の面浮立であり、衣装や所作が類似している。

浜祇園祭でも奉納される大村方獅子舞は、祐徳門前町の各店舗で踊りながら商店街を巡行した後、神社境内にて奉納踊りを行う。



写真 商店街の店舗を巡る大村方獅子舞

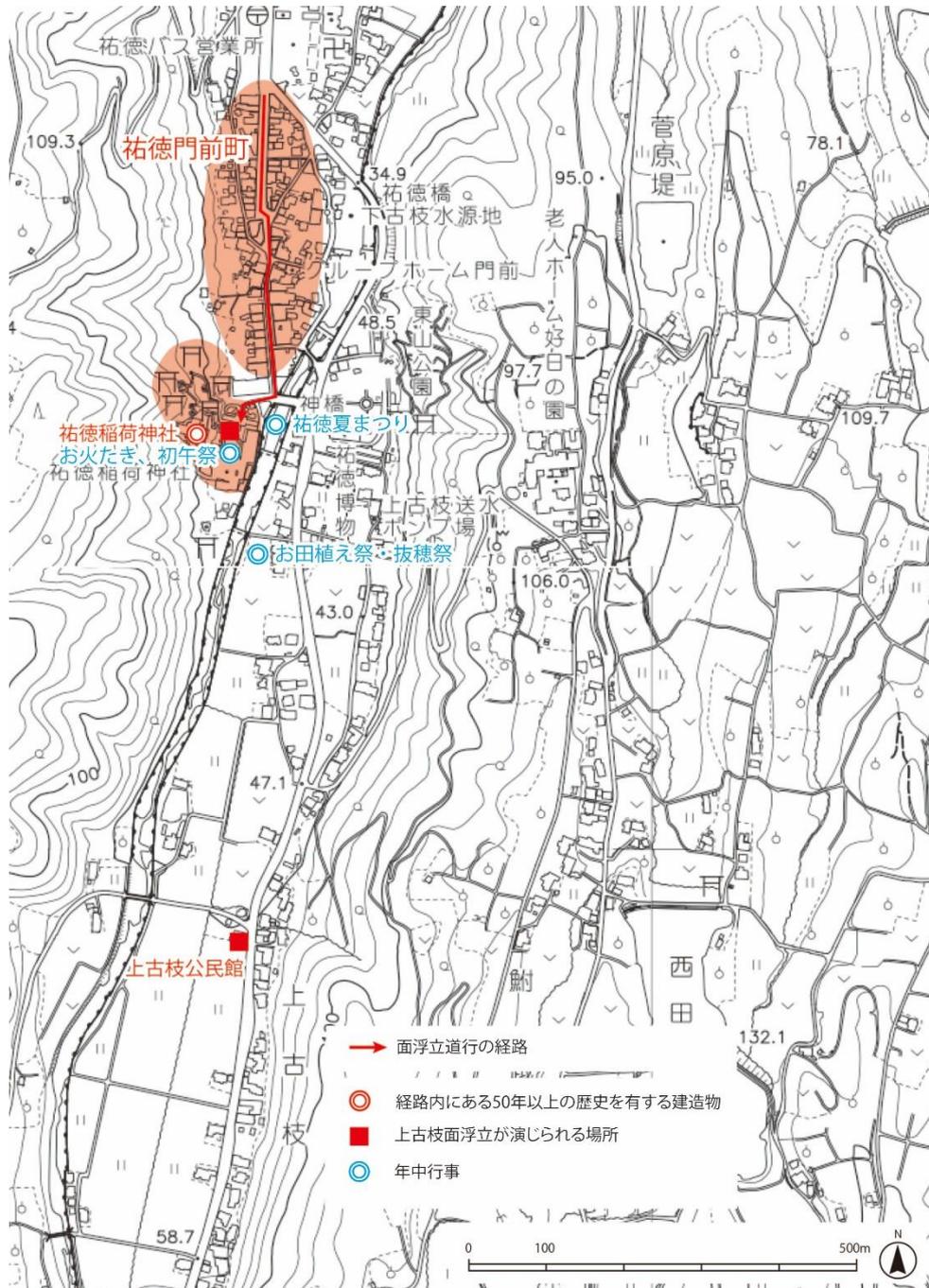


図 祐徳稲荷神社の周辺

2) 祐徳稲荷神社の参拝

<祐徳稲荷神社参拝のはじまりと参拝順路>

鹿島藩 3代藩主鍋島直朝夫人の萬子なべしまなおともが稲荷大神の御分霊を勧請して以降、祐徳稲荷神社は鹿島藩主からの信仰が篤かった。また、その御神徳が大変大きかったことから、後の時代に住民にも広く開かれており、それ以来、大勢の参拝者が訪れ、農業、漁業、商工業の守護神として広く信仰を集めている。祐徳稲荷神社参拝には、長崎方面から、山を越えて山沿いに神社へ向かうルートや、海上交通の拠点であった浜宿を經由し、浜川沿いに神社へ向かうルートなどが古くから利用されていた。

明治 37 年 (1904) に武雄たけおから鹿島、塩田を經由し、祐徳門前までを結ぶ馬車鉄道が
ゆうとくきどう
 開通し、浜には祐徳浜駅が設けられた。この路線は「祐徳軌道」と呼ばれ、参拝者などの来訪者の交通手段として利用された。大正 10 年 (1921) に馬車鉄道は石油発動車を経て、蒸気機関車に代わっている。

『祐徳稲荷神社案内記』(1909)には、彼杵そのぎ、白石、南海岸、海路の各方面からの参拝順路が示されており、海路からの順路として、有明海から八本木村の浜宿に上陸し、祐徳軌道に連絡する経路が記されている。

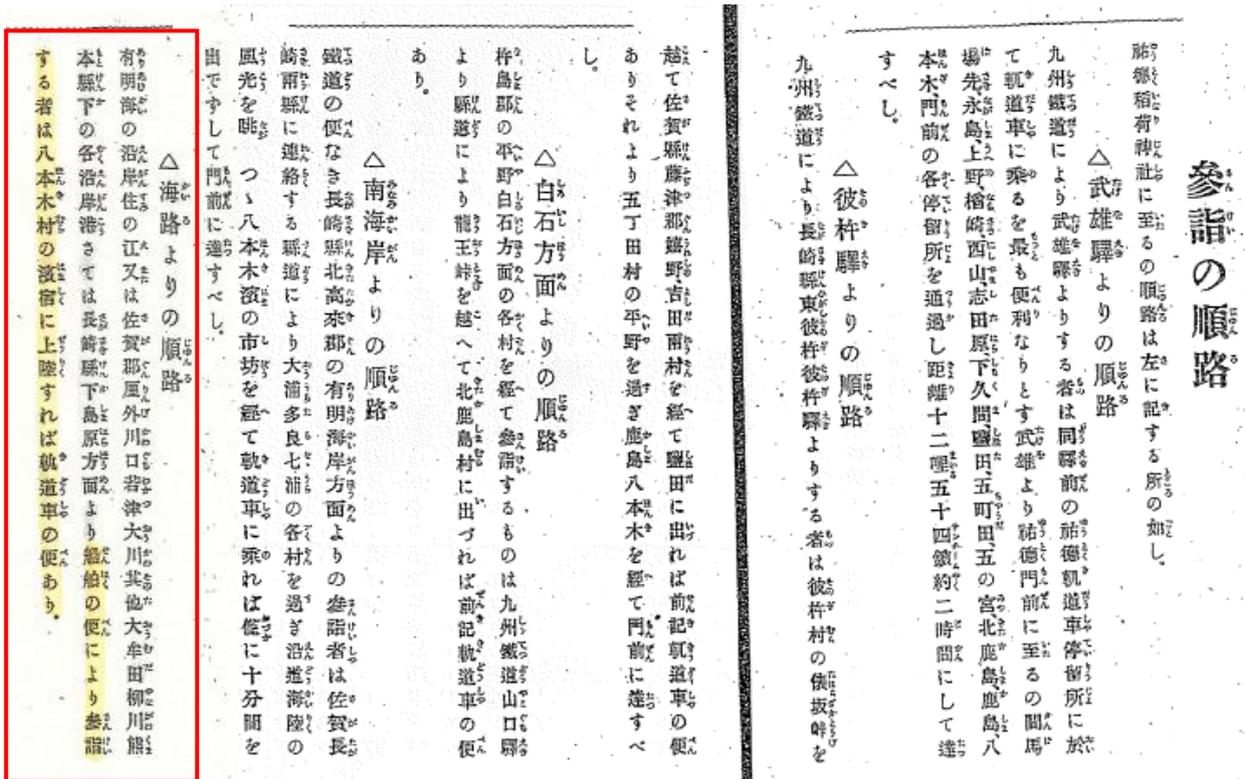


写真 祐徳稲荷神社参詣の順路案内 (『祐徳稲荷神社案内記』(1909)より転載)

昭和5年（1930）にはJR長崎本線（当時は「有明線」と呼ばれていた）が開通、肥前浜駅ができた。昭和9年（1934）頃には乗り合いバスが普及し、祐徳軌道は役目を終え、廃止された。これ以降、肥前浜駅が祐徳稲荷神社参拝の最寄り駅となっている。

『鎮西日光祐徳稲荷神社参拝の栞』（昭和初期）にも周辺から祐徳稲荷神社へのアクセスが示されており、最も近い濱駅（現在の肥前浜駅）が交通の要所となっていることが分かる。肥前浜駅開設後の昭和8年（1933）には、肥前浜駅前に祐徳稲荷神社の一の鳥居が建造され、平成19年（2007）に解体されるまで、祐徳稲荷神社参拝の玄関口として参拝者を出迎えていた（p.103 コラム参照）。

肥前浜駅が開設されるまでの主な交通手段であった祐徳軌道の線路のあとには道路が整備され、現在の参道となっている。

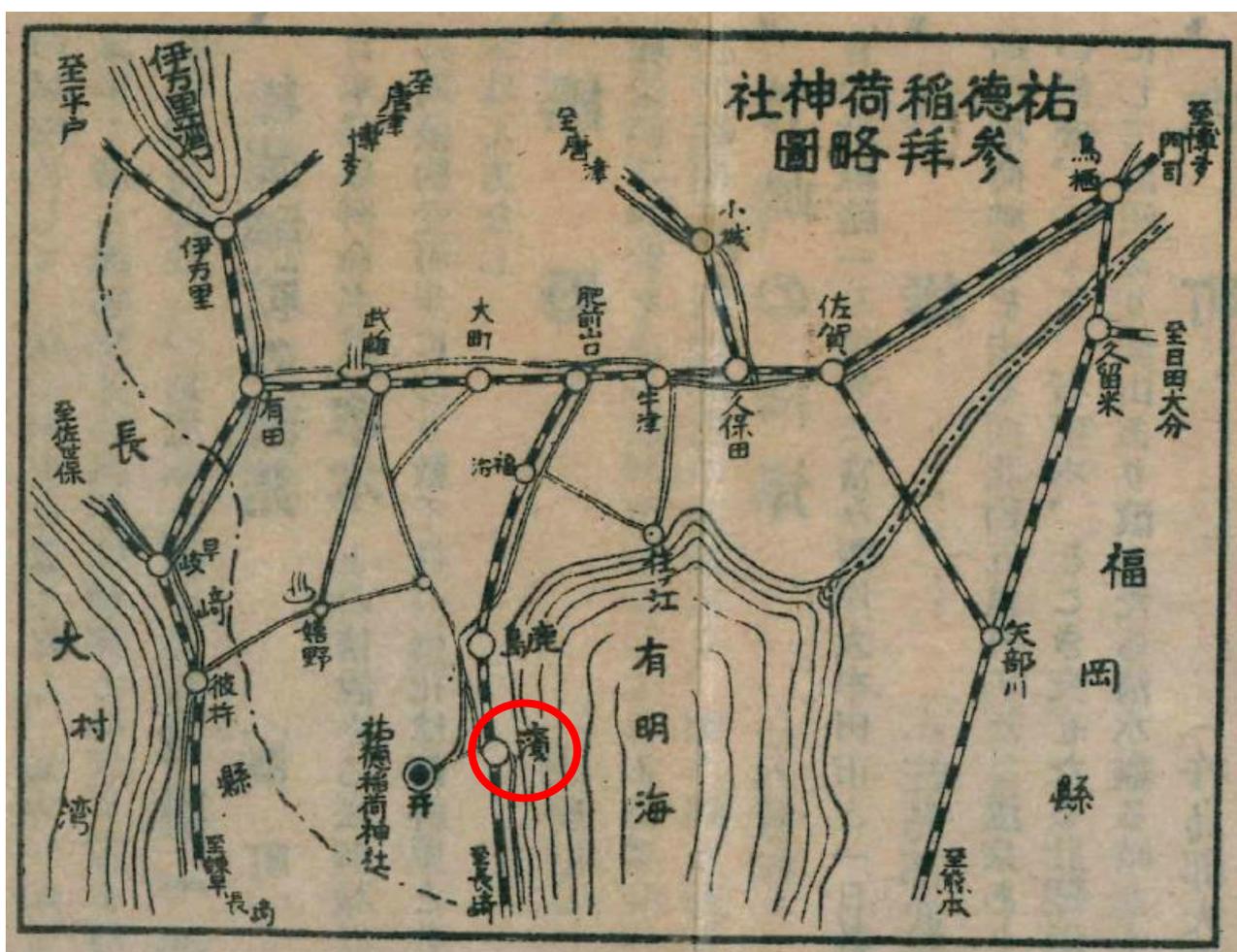


写真 祐徳稲荷神社参拝略図（『鎮西日光祐徳稲荷神社参拝の栞』より転載）

<祐徳稲荷神社参拝と楽しみ>

祐徳稲荷神社が一般に広く開かれて以降、大勢の参拝者が訪れているが、交通の便が整うまでは、遠方から日帰りで参拝することは難しかったため、祐徳門前町には津多屋、角屋、三都屋、柳屋、若松屋など、当初は旅館であった店舗が数多く残っている。これらの遠方からの参拝者は、祐徳門前町の旅館に泊まり、参拝と同時に旅館での食事や周辺の遊覧、井手商店や松屋などの商店で、名物の祐徳せんべいやゆずこしょう、稲荷ようかんなどの土産物の買い物を楽しんでた。

『鎮西日光祐徳稲荷神社参拝の栞』(昭和初期)には、祐徳稲荷神社を中心とする遊覧個所のひとつとして、「濱・城の上」が紹介されている。城の上は事比羅神社のことで、不知火望見の好立地であることや、醸造家、漁家が多いことに加え、祐徳稲荷神社の一の鳥居があることや、同様に松岡神社の梅苑も紹介されている。祐徳稲荷神社社務所が発行したパンフレット『肥前鹿島祐徳稲荷神社』(1929)にも、「付近名所遊覧ご案内」として「松岡神社」、「濱公園(現在の城の上)」に加え、「濱町(現在の浜町)」の紹介が記載されている。このように、祐徳稲荷神社の参拝の紹介と合わせて浜町周辺の紹介がなされていることから、浜町周辺が祐徳稲荷神社参拝の前後に立ち寄る遊覧地とされていたことが分かる。

また、鹿島藩の主要な港であった肥前浜宿の2つの重伝建地区一帯は、海上交通の拠点であったことから、さまざまな物資の集まる場所でもあった。目新しい品物を物色し、肥前浜宿で土産を購入して帰ることも参拝の際の楽しみであったと推察され、特に海上交通を利用した有明海沿岸地域からの参拝者については、参拝後、潮が満ちるまでの間の待ち時間を肥前浜宿周辺で過ごしていたと伝わる。(有明海は干満の海面差が最大6m近くあり、干潮の際には干潟が広がり、船を出せないため。)

肥前浜宿と祐徳稲荷神社間の参拝や観光回遊による往来は、かつては徒歩であったものが明治37年(1904)に開通した祐徳軌道の利用、昭和5年(1930)に開通したJR長崎本線の利用や同時期に普及した乗り合いバスの利用といった参拝の交通手段の変遷を経て、現在の自家用車での移動に至っている。しかし、自家用車での参拝が主流となった現在においても、肥前浜駅で降車し、まちなみの散策をしながら祐徳神社へ向かう参拝者や、近年見られるようになった肥前浜駅で貸し出されているレンタサイクルを利用した参拝など、まちなみや周辺の景観をゆっくり楽しみながらの参拝も続いている。

平成24年(2012)からは「鹿島酒蔵ツーリズム®」が実施されるようになり、翌平成25年(2013)以降は「祐徳門前春まつり」と連携して実施されるようになった。ツーリズムの際には肥前浜宿と祐徳門前町を行き来する循環バスが運行するが、バスを利用せず、日本酒を楽しみながら浜川沿いを歩いて祐徳稲荷神社へ向かう観光客も多い。これにより、肥前浜宿と祐徳稲荷神社の観光回遊はより活発となりつつある。

こうした、祐徳稲荷神社の参拝前後に肥前浜宿に立ち寄り、買い物や周辺の遊覧を楽しむ様子は、少なくとも『祐徳稲荷神社案内記』の作成された明治期頃から見られた人々の活動であるといえる。



写真 鹿島酒蔵ツーリズム® (祐徳門前春まつり)



写真 鹿島酒蔵ツーリズム® (花と酒まつり)

3) 浜川を利用した生活

＜浜川の水の利用＞

浜川は、経ヶ岳に端を発し、祐徳稲荷神社や祐徳門前町に沿うように流れ、肥前浜宿の2つの重伝建地区の間を通り、有明海に注いでいる。谷あいにある祐徳稲荷神社付近では、浜川の流れとその両側の山の緑、緑に映える朱色の神社建築物が一体となって周辺の景観を構成しており、参拝者の目を楽しませている。神社の前を流れる浜川は、「錦波川」とも呼ばれ、かつては神社参拝前の禊きんぼがわを行う場であり、地域の住民からも特に大切にされてきた。

浜川の流域に生活する人々は、古くから浜川の水を生活に利用してきており、浜川のほとりで洗い物をする様子が、昭和初期頃の写真に残っている。

祐徳門前町では、祐徳稲荷神社入口付近にある水門からまちなかへ浜川の水が取水されており、商店街の住民が水門や水路の管理を行っている。水路は、いくつも枝分かれしてまちなかを流れており、かつての旅籠はたごであった店舗の庭園の池や、祐徳門前町名物の鯉料理を参拝客に提供するための鯉の生け簀へ取水するなどの利用が行われていた。現在においても、商店街の店舗や個人宅裏の庭園の池には浜川から取水した水路からの水が流れており、水路の水が流れ込む生簀兼用の池では、



写真 浜川と谷あいの景観



写真 浜川での洗い物 (昭和初期頃)



写真 浜川から商店街へ流れ込む水路

祐徳門前町名物の鯉料理用の鯉が泳ぐ姿を眺めることができる。

肥前浜宿の重伝建地区においても、浜川から取水した水路がまちなかをいくつも枝分かれして流れており、日々の洗い物などは、この水を使用していた。この水路には、さまざまな場所に石積みの^{たなじ}棚路（水路へ下りる石段）が多数残っていることから、水路の水を毎日の生活に利用していた当時の様子うかがえる。現在においても、水路の水は夏場の打ち水や庭木への散水、水路に鯉を生かして観光客の目を楽しませるなどの利用が行われている。また、『地理学講座第7巻』（1937）には「酒造に使用する水は多くは濱川の水であるが、其の水質の良いことも一因であろう」との記載があり、かつては浜川の水が肥前浜宿の特産品である日本酒の醸造にも利用されていたことがわかる。

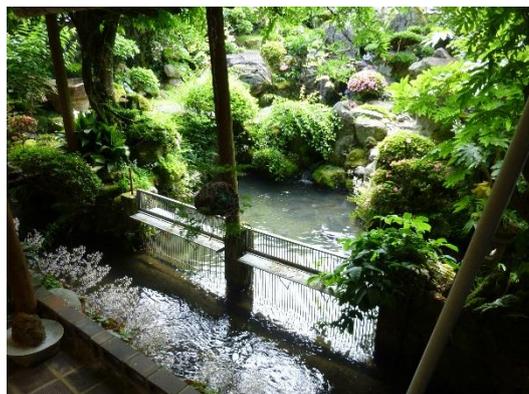


写真 浜川の水を利用した庭園の池（生簀）



写真 酒蔵通りを流れる水路の棚路

古くから浜川の水を生活に利用してきた祐徳門前町や肥前浜宿をはじめとした浜川流域に暮らす人々は、定期的に浜川のごみ拾いや草刈りなどの一斉清掃や、「毎月第1日曜日」など地区で日付を決めてまちなかを流れる水路の土砂上げや清掃活動を行っており、現在も生活に密着した浜川の水を大切にされた生活を送っている。

このような清掃活動がいつごろから行われているかは定かではないが、地区の高齢の方より、「小さい頃に大人たちと一緒に川の中で小石や木の枝の除去作業に行っていた」という話があることから、昔から浜川流域に住む人々が、大人も子供も皆で身近な浜川の清掃を続け、浜川とその水質を守ってきたことが伺える。



写真 浜川や水路の清掃活動

<名物の川魚>

祐徳門前町では、鯉料理が名物となっている。全国の観光地を紹介する本『旅、第4』(1961)で祐徳稻荷神社が取り上げられており、その中で、楽しむ「あじ」として、「祐徳門前の旅館や食堂では「コイこく」や有明海特産の小魚「むつごろ。」と紹介されている。現在も祐徳門前町にある食事処のうち、角屋、三都屋、立花屋、若松屋、家督屋の5つの店舗では、鯉のあらいや鯉こくなどの鯉料理を提供しており、参拝客は、明治期より門前町のまちなかを流れる水路や、鯉の泳ぐ庭園を眺めながら、少なくとも『旅、第4』の書かれた昭和中期頃には門前町の名物となっている鯉料理を楽しんでいる。鯉のあらいは、酢味噌や、祐徳門前町のお土産としても親しまれているゆずこしょうで食す。

肥前浜宿では、二十日正月に恵比寿に供えて家族で食し、300年以上の歴史のある郷土料理である鮎の昆布巻き(ふなんこぐい)が名物となっており(詳細は第2章第1項に先述している。)、近年は「ふな市」で調理済みの「ふなんこぐい」販売もされているため、肥前浜宿の伝統的建造物群を訪れる市外の観光客にも親しまれるようになった。

両地区ともに、川魚を利用した料理を名物としていることから、身近な浜川の恵みである川魚を古くから利用していたことが推察される。



写真 祐徳門前名物の鯉料理
(奥：鯉のあらい 手前：鯉こく)



写真 肥前浜宿名物の鮎料理(ふなんこぐい)

まとめ

江戸時代に創建され、鹿島鍋島藩の信仰が篤かった祐徳稲荷神社は、住民に広く開かれて以来、現在まで多くの参拝者を集めている。特に初詣の時期や、お火たきやお田植え祭、夏祭り、初午祭といった年中行事の際は多くの人で賑わう。

また、当初旅館だったとされる間口の広い町家が並ぶ門前町は、地区の名産品を扱った商いによって、参拝者を楽しませ続けている。

かつて海路からの参拝順路として参拝者に利用された浜町は、祐徳稲荷神社の周辺の名所として、参拝者が買い物や周辺の観光を楽しむ物見遊山の地になったことがうかがえる。近年は鹿島酒蔵ツーリズム®として、肥前浜宿と祐徳稲荷神社を結ぶ観光ルートが多くの人々に利用されている。

加えて、肥前浜宿を流れる水路も、祐徳稲荷神社門前で目にする水路や庭園の池の水も浜川から引き込まれたものであり、浜川の恵みを生活に取り入れてきた両地区は浜川の利用に関するつながりも見られる。

このように、祐徳稲荷神社から肥前浜宿にかけての地区では、参拝を楽しむ人々の活動や浜川を介した人々の生活が地区の建造物と一体となり、歴史的風致を形成している。

<コラム> 肥前浜駅前にあった祐徳稲荷神社の赤鳥居

肥前浜駅前の交差点から少し肥前浜宿のほうへ入った場所に、大きな赤鳥居が建っていた。昭和8年（1933）に設置されたこの赤鳥居は、祐徳稲荷神社の一の鳥居であり、高さ18m、幅23m、「祐徳稲荷神社」と書かれた額の大きさは畳6畳分の大きさがあったと言われている。設置当時は全国で最大級の大きさだったとも言われており、電車で肥前浜駅を訪れた参拝者は、この赤鳥居をくぐり、祐徳稲荷神社へ向かっていた。設置以来、浜町の象徴として地元の方々に愛されてきたが、老朽化のため、平成19年（2007）9月に惜しまれながら解体され、現在は跡地に肥前浜宿のまちなみ案内板が設置されている。現在においても、肥前浜宿への観光客と祐徳神社参拝客は、肥前浜宿のまちなみや日本酒と、祐徳稲荷神社参拝を合わせて楽しんでおり、肥前浜宿と祐徳稲荷神社の行き来が続いている。



写真 解体前の赤鳥居



写真 設置された頃の赤鳥居

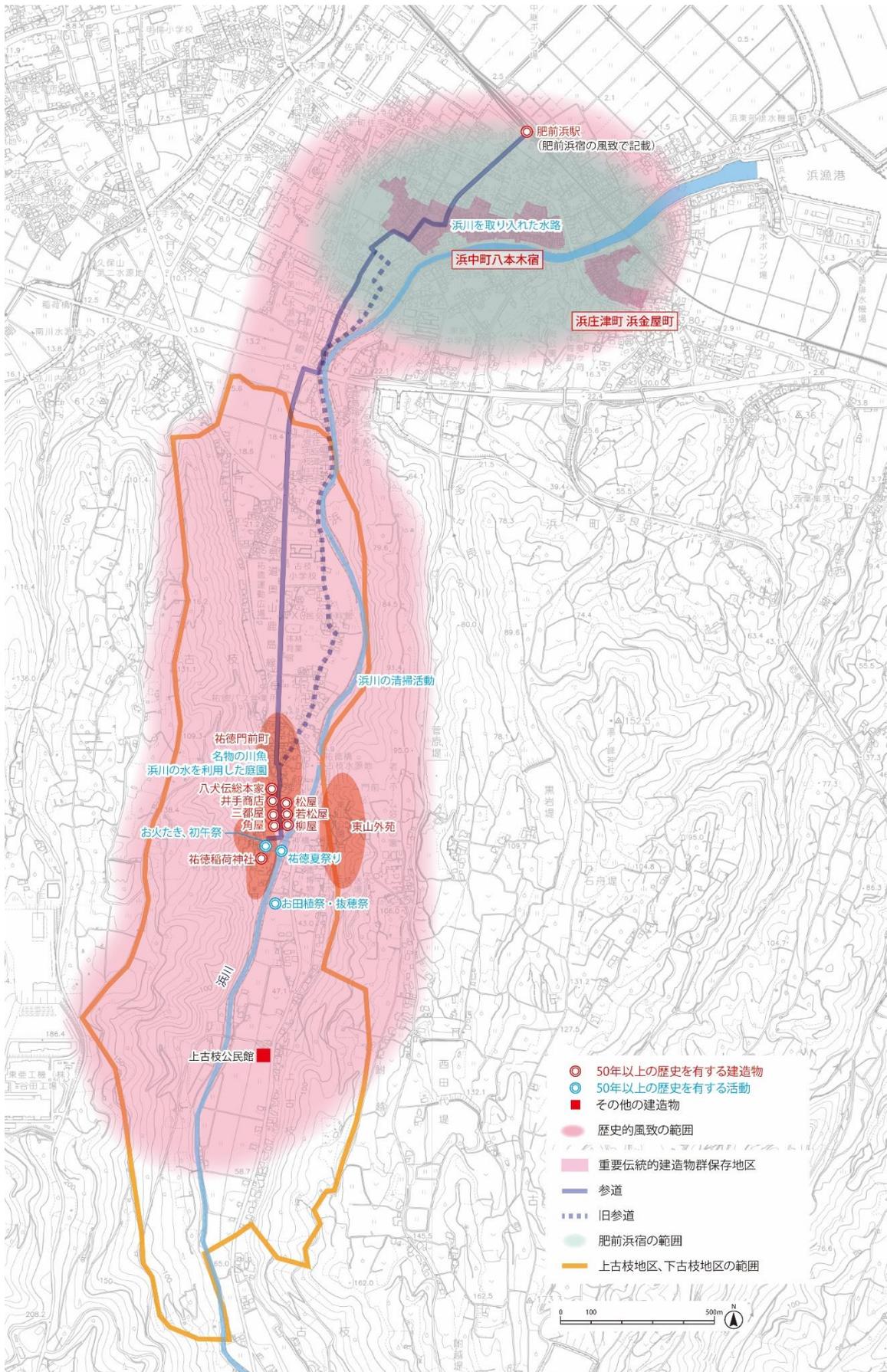


図 祐徳稲荷神社参拝と地域の営みからみる歴史的風致の範囲